

## 自閉的傾向がある外国人児童の支援の在り方について

早川 昌子 (名古屋市立守山養護学校)  
都築 繁幸 (愛知教育大学障害児教育講座)

**要約** 本報告は、外国籍で自閉症傾向を持つ小学3年生の児童に対して、学級支援員としてどのように接すればいいのか、児童がわからないで困っている場合にどのように声をかけたらいいのかなどを検討したものである。その結果、学級支援員として、(1)嫌われることを恐れず、許せないところははっきりと注意をする、(2)思いっきり児童たちと遊ぶ、(3)できるだけクラス全員と話をするように心がける。目立たない子ほど見てあげて、機会をみつけて話をする、(4)情報交換ノートには正直な気持ちや担当がいなかったときの出来事などを書いて、お互いの思いが伝わるように心掛ける、等を心がける必要があることが示唆された。

**キーワード**：発達障害、自閉的傾向、外国人、特別支援教育

### I. はじめに

本稿では小学3年生の外国籍の男児A(以下Aと記す。)に対して学級支援員として支援を行なった指導経過を述べる。Aは自閉症傾向があるが、日常生活を送ることに支障はなく授業も聞いていれば自分で理解できる。特に必要な支援というものはなく、声をかけたり少し手伝ったりすることだけで多くのことができる。また、友達関係も良好でコミュニケーション能力もある。

学級支援員として対象児には常に気かけ声をかけながらクラスの児童たち全員とかかわり、Aができるように、また、学級の状況にふさわしくない行動をしてる児童にどのように接すればいいのか、わからないで困っている児童にどのように声をかけたらいいのかなどを検討することとした。

### II. 児童Aへの支援

#### (1) 消しゴム遊び

Aは興味がない授業になると消しゴムを人や戦闘機のようなものに例えて、遊びだす。その頻度が高い授業が社会であった。算数はとても得意なので計算や図を描くことは意欲的に行う。社会では、教師が話していることが徐々にわからなくなると、最終的に消しゴムで遊びだし自分の世界に入り込んでしまう。そこで声をかけても具体的にやることがわからないと遊びをやめない。例えば以下のような場合、具体的にやることがわかっているので遊びをやめて、取り組むことができる。

#### 【社会の時間】

A：「ピシッピシ！ドーン！（消しゴムを両手に二つもって遊んでいる）」  
Aに近づき目をみながら、  
支援員：「A君、地図の色を塗るよ。川を水色で塗ってごらん。」

地図を見せて川を指さす。

A：「ん？ここ？」

色鉛筆を取り出し色を塗り始めた。Aは色を塗るという具体的な行動をイメージできたため、遊びをやめることができたのだと考える。

#### 【国語の時間】

教師：「この子の気持ちはどんな気持ちかな。」

A：「ピシッピシ！ガガガーピューン！（消しゴムで遊んでいる）」

支援員がAのノートを見ると、教師の問いかけに関係する内容が書いてあった。

支援員：「A君、ここ見てみて。書いてあるじゃん。手あげて言ってごらん。」

A：「ん？これ？」

支援員：「そうだよ、今この子の気持ちはって先生聞いているんだよ。」

A：「はい！先生ぼくわかるー！」（嬉しそうに手をあげた）

Aは、自分のノートに書いてある内容を見て、すぐに先生に言うことができることがわかり喜んで手をあげる行動をとれたと考える。

反対に以下のような場合、やることが具体的にわからずAが全く支援員の言うことを聞かずに、消しゴム遊びをずっと行っていた。

#### 【社会の時間】

教師：「なんで田んぼの近くには川が流れているのかな。」

A：「デュクシ！シュー、ドーン！（消しゴムで遊んでいる）」

支援員：「ほらほら、A君地図見てごらん。なんで田んぼの近くには川が流れてるのかな。」

A：「デュクシ！ヒューーン、バーン！（遊びを続けている）」

支援員：「ねえねえ、地図見てみて。なんでかな。」

A：「ん？知らない。」（地図をあまり見ずに考えるそぶりも見せない）

これは、考えることがとるべき行動なので、具体的

ではなくAは興味をしめさなかったと考える。しかし、Aの能力であれば教師の内容を理解し、自分で考え意見を話すことができる。指示の内容がわからないから遊びをやめないのではなく、本人が興味があるかないか、やろうと思う内容かどうかだと考える。それは、障害があるないにかかわらずどの児童にも当てはまる。小声で色々、促してはみるものの、Aは全く興味を持たず、それどころか支援員の問いかけに対して普通の声の大きさに答えるため、逆に授業のさまたげになるのではないかと考えた。Aに無理やりやらせることもできなかったため、しばらく声をかけず遊んだ状態のままにさせた。そして、他の作業になるときにまた声をかけるようにしていった。Aはその声かけで、遊びをやめるときもあれば、やめないときもあったが、担任の教師の働きかけがあるとすぐに作業に取り組むことが多かったため1時間中ずっと消しゴムであそんでいるということにはなかった。また、消しゴムで遊び始めたすぐに声をかけて授業の説明をすると、すんなりと遊びをやめて勉強に取り組むことが多かった。そのため、なるべく他ごとをしだしたらすぐに声をかけるようにした。

## (2) 手洗い

Aはコミュニケーション能力もあり、勉強も理解できている。人が言っていることを理解してそのことに対して考えることもできる。人の気持ちもわかる。必要な支援は、時々消しゴムを使って遊びだし授業を聞いていない状態になるのでそこで声をかけて授業に集中させる程度であった。年明けの授業で書初めがあった。自分の指で筆の先をそろえて書いていたので少し驚いたが特に何も言わずに見守っていた。Aなりにとても一生懸命書いていた。しかし、墨があちこちにつき顔にもついていたので、担任が手を洗ってくるように言った。Aは一人で洗いに行ったが、なかなか戻ってこなかったのでトイレに見に行った。すると、自分の服の袖を塗らし一生懸命手についた墨をとっているが、なかなかとれずにずっと冷たい水で洗っていた。トイレの紙を使って顔の墨と手の墨をふき、濡れた袖をまくって教室と一緒に戻った。Aは少し嬉しそうだった。このとき、ほとんどのことができるAだが、なかなか取れない汚れがついた手を洗うことは難しいことや、自分の袖が濡れることもなんとも思わずふいてしまうAの特徴を見出した。ほとんどのことが普通にできるが、色々な場面で支援員として気をつける事柄があることを認識する。

## (3) 通級指導

Aは金曜日の1時間目に通級指導教室に通うことが多かった。取り組んでいたことは、

- お話

- すごろくゲーム

- かくれんぼ

であった。まず日付や最近起こったことなどを話ながらメモをとる。次にすごろくのゲームをした。これは、カードと書いてあるマスに止まったらカードを引く。すると、さまざまな状況が書いてあり、そのような場合あなたはどうしますか、と問うカードである。Aの答えをノートにメモしながらゴールを目指した。必要であれば正しい行動を教えながらゲームが続いた。かくれんぼもたまたまAの強い希望で行った。支援員が来るとハイテンションになってしまい落ち着かないということから一緒に通級に行くのは止めることにした。Aは「一緒にいこうよ」と言ったが、支援員が行くと落ち着かなくなるので「教室でお手伝いしないといけないからいけないの。」と言った。

## III. 支援員の役割

### (1) どこまで指導していいのか

【○月○日】

支援員としてB小に行きはじめ、2回目よりの出来事である。児童二人がコンパスを持ちながらふざけあっていた。すると一人の児童がコンパスの針の方を相手の児童に向けてさすようなしぐさをした。ふざけ合いからだだが、とても危険な行為だったので支援員は強めに注意した。すると、児童はそのままふざけた感じで悪気もなく笑っていたので、真剣に話をした。支援員は、ここで指導しなければ、いつかまた同じことをする。その時は大変な事態になる可能性もある。ここでしっかり針を相手にむけることの重大さを認識させなくてはいけないという思いが強かった。その事態に気付いた担任が来て話を詰めてくれた。児童二人はそのことの重大さを認識し反省して終わった。

【感じたこと】

このとき支援員は支援員という立場のむずかしさを感じた。中学ではいけないことをした生徒にきつく注意することはあった。しかし、そこには信頼関係があった。良いところはほめたり、なんともない話をして笑ったり、一緒に時間を過ごしていく中で信頼関係がうまれる。その結果、きつく注意されても生徒は教師の言っていることを理解できたり、素直に反省できたりする。支援員という立場は、その信頼関係がまだない。しかも、出会って二日目の出来事であったため、いけないことをした児童に対してどこまで強く言っているのかわからなかった。強く注意しすぎてこれからの関係が築きにくくなったらどうしよう、受け入れられなくなったらどうしよう、この後のフォローができないし怒らないで、冷静に説明したほうがいいのか、など余計な心配が頭をよぎり、心から注意できない支援員としての立場を再考した。

## 【学級担任とのやりとり】

このできごとを担当との情報交換ノートには正直に気持ちを書いた。すると、担任から「経験があるからこそ生まれる当然の悩みだと思います。・・・今日とられた先生の態度は花丸なのではないでしょうか。・・・徐々に子どもたちの様子がわかってくると自然にもっと厳しくなってくると思います。」という返事をもらった。

支援員がどう感じてどう考えているのかを担当に伝えることで、担任がどう指導していきたいのかという考えも伝わる。この情報交換ノートに出来事や児童のことだけでなく、支援者の悩みや考えていることなど正直な気持ちを書くことでコミュニケーションをとることができる。その結果、担任の思いもわかり、どのようなことに気を付けて児童を見ていけばいいのかが感じることができる。また、担任のふるまい方もその裏にどのような意図があるのかが感じながら見ることができる。

支援員と担任と話す時間はない場合、その中でどのようにお互いを理解していくかが大切であり、情報交換ノートは重要なツールである。

## (2) 長放課の大切さ

週に1度の午前中のみの支援員の場合、児童と接する機会が少なく、放課でたくさんの児童と関わることが大切になってくる。B小では、2時間目の放課は20分あり多くの児童は運動場でサッカーや鬼ごっこなどをして遊ぶ。支援員の初日から長放課に児童たちと遊んだ。児童たちは大変人懐っこくて支援員の腕をつかみ「先生一緒に遊ぼう！」と声をかけてくれた。鬼ごっこやシーソー、増え鬼、縄跳びなどで毎週遊んだ。

## 【遊びから見えてくること】

児童の性格を知る一番の時間である。授業では、男子児童が落ち着きがなく手がかかるのに対し、女子児童は状況に合わせて静かにすることができたので、関わりが少なくなりがちであった。この長放課では、支援員が同性ということもあり女子児童と遊ぶことが多く、女子児童との関わりがとれる大切な時間であった。児童間の人間関係や、一人ひとりの性格などが遊びを通して見ることができる。

## 【きつい言い方に対して】

成績優秀できちんとした女子児童だが、言い方がとてもきつかった。ある日長放課で遊んでいると、他の児童がきて「入れて！」と言ってきた。するとその女子児童が「え、どうする？」と周りの児童に聞くようなそぶりを見せた。支援員はその様子を見て、「みんなで遊んだ方が楽しいよ！一緒に遊ぼうよ！」と言った。女子児童は少しむっとした表情でうなづき、みんなで遊んだ。

どう感じたかはわからないが、その後はいつものと

おり楽しそうに遊んでいた。支援員の声かけが一つの経験になればいいと思った。今まではどうであったかはわからないが、「入れて」と言ってくる子がいるときに、すぐ入れてみんなで楽しく遊ぶという経験があるのとないのでは違うと考える。

## 【小学3年生の心】

毎週遊んでいると気になることが時々ある。例えば友達に対してそこまできつく言わなくていいのではないかということであったり、自己中心的な行動である。楽しく遊ぶ放課中の出来事であるので、喧嘩に発展しない限りできるだけ見守って、声をかけるときも優しくかけるようにした。どうしても気になったことは、学級担任との情報交換ノートに書いた。

## 【様々な発見】

長放課はまた、児童の良いところを発見することもできた。下駄箱に落とした支援員のボールペンを拾った児童が、遠くで遊んでいた支援員のところへ一生懸命走って届けてくれたり、走っていて転んでしまった支援員を真剣に心配してくれた児童がいたり、支援員の体調が悪い時に走れないと言ったら上り棒で遊ぼうと言ってくれた児童がいたり、児童一人ひとりの優しいところを知ることができた。また、大勢での話し合いの中でまとめ役の児童であったり、みんなのことを考えている児童であったり、はっきり思ったことを言う児童であったり、集団の中での様子を知ることでもできた。長放課は児童たちも心を解放しているので、家族の話や自分の習い事の話などたくさん話にきてくれた。そこから児童の環境や感じていること頑張っていることなども知ることができた。これらの発見が授業中の支援にも役立つ。児童との信頼関係は長放課で一緒に遊び一緒に楽しむことから、築かれていく。

## (3) 児童Cとのやりとりを通して

## 【児童C】

担当した3年1組には、一番目立つ男児D（以下Dと記す）がいた。Dは、ブラジル国籍の少し大柄である。落ち着きがなく授業中も静かに席に座っていることは難しい。何かをいじっていたり、椅子を斜めに浮かせて揺らしながら座っていたり、鼻歌を歌ってしまったりする。また、まだ精神面が幼く衝動的に善悪を考えず行動してしまうことがあり、友達にちょっかいをだして喧嘩になることも少なくない。集中力がなくクラス全員が静かでも気にせず何か思い浮かんだことがあると大きな声で話し出してしまふ。しかし、そこに障害はない。厳しい教師の言うことは聞かずに、優しい教師のいうことは聞かず暴言をはくなど反抗的な態度にでることもある。特別支援学級の児童に対して優しく接することができ、特別支援学級の児童から好かれているようだ。

## 事例1

【〇月29日】

1 限目、歌の発表会が近いのでクラス全員で歌の練習をした。指導する先生が来て歌の練習が始まった。ほとんどの児童が一生懸命歌っている中、Dはいつまでたっても歌わず、周りの児童にちょっかいを出していた。はじめは注意する程度で様子を見ていたが全く態度は変わらず、一生懸命歌っている児童に対して輪ゴムを投げだした。その様子を見て支援員はたまらずDを力づくで廊下に出した。きつく注意をして話をしたが、最終的に「さわるな」、「いやだ」しか言わず、すねてクラスから離れた廊下の隅で動かなくなってしまった。それからは、優しくなぜ支援員がきつく注意したのかを説明したが、耳を両手でふさぎ全く聞こうとはしなかった。「落ち着いたら教室においで」と言って支援員はその場を立ち去り、職員室にいる担任に今までの経緯を説明した。その後、歌の指導をしていた教師がDに話をしたが全く聞く耳もたず、「本人もわかってはいると思うから気にしないでいいよ」と声をかけてもらった。他の教師にも迷惑をかけてしまったという思いとフォローをしてもらった感謝と両方の気持ちを抱いた。その後のDは、教室には入ってきたが、支援員が近くに行くとするどい目でにらみつけてきた。それに対しては支援員は何も反応せず、そのままそっとしておいた。

何がいけなかったのか、言い方なのかなんなのか支援員自身とても悩んだ。来週までDとは合わないので一週間ずっと頭から離れなかった。

【学級担任とのやりとり】

この日の情報交換ノートに一連の出来事を書いた。[Dはいつものことです。「この先生の言うことは聞くけど、この先生の言うことは聞かない」と決めてしまって、頑固に変わらない感じですよ。いやな思いをされたと思いますが、気にされないでください。「誰の言うことでも聞ける」は今後のDの大きな命題です]という返事が来た。「この先生の言うことは聞かない」という中に入っていることはさみしかったが、週に一度しか行かず、たまに来て怒られても素直に聞けないことはある意味普通のことかもしれない。Dがこれから問題のある行動をしたときに、注意してまたこのようになることは怖いですが、それを恐れずに例えDが聞かなくても支援員である筆者はいけないことだと伝えていかなければいけないと思った。

【〇月5日】

一週間後、Dのことがとても気になっていた。朝教室に入りクラスを巡回しているとDの横を通過したときにまたDがにらんでいるのがわかった。まだひきずつているのかと思った。1限、2限とDとはあえて自分から関わることはせずにいた。すると長放課でD

の方から「先生見て！三角の石！」と話しかけてきた。「ほんとだねー！すごいね！」と笑顔で会話をした。支援員としてとてもほっとした出来事であった。

## 事例2

【12月3日】

朝クラスに行く途中でトイレの前でもめているDと児童Eに会った。児童Cはトイレに行きたがっていた。Dは児童Eの襟元をつかみ「朝の会の時間だぞ！トイレに行っちゃいけないんだぞ！教室戻れよ！」と言ってトイレに行かせずに教室に戻そうとしていた。支援員は「トイレは我慢できないときがある。先生が許可するから行ってらっしゃい。」と言って児童Eをトイレに行かせた。Dはまたするどい目でにらみながら「先生いけないんだぞ！朝の会だから教室いかないと行けないんだぞ！」と言ってきたので、説明をしながらなだめたが言うことを聞かなかった。先生が許可したからそれでいいの！Dがとやかく言う資格はない！」ときつく注意した。そうこうしているうちに児童Eがトイレを終え教室に戻った。支援員はDに「教室に戻るよ」と声をかけてその場を去った。しばらくしてもDは教室に入ってこない。廊下を見ると外に立ったままのDがいた。教室に入ってから後ろで立ったまますねていた。支援員は話をした。Dが主張したことは正しいこと、例外はあってトイレは我慢できないことがあることなどを話した。Dは涙を流して支援員をにらみ席に着いた。その涙は反省の涙ではないように感じたが、気持ちがわかってもらえない悔しさなのか、なんなのかがわからなかった。また来週もしばらくこの状態が続くと思ったが、長放課にDは笑顔で話しかけてきた。嬉しそうに「先生ほくの二十跳び見て！」と言ってきたのだ。その後も縄跳びを持っていない支援員に、「ほくの貸してあげる」と言って貸してくれた。切り替えが早くなったのかとうれしく思った。その日の出来事を全て情報交換ノートに書いた。

【学級担任とのやりとり】

やはり、Dの涙は叱られたことに対する悔しい涙でしかないということであった。そして、その時の気分だけなので深く洞察しないでいいと思うというアドバイスが書いてあった。Dを強く注意するたびにあれこれ考えて一週間重たい気持ちになるときもあった。担任はクラスの児童一人ひとりを大変よく理解しており、支援員とは全く比べ物にならない時間を共に過ごしているのである。そのアドバイスは適格であり、Dのことで悩むことが多かった支援員に対して心が楽になるものであった。このようなやりとりのおかげで、これからは怖がらずいけないと思ったことはいけないとどの児童に対しても注意していこうと前向きに思うことができた。

#### IV. おわりに

こうした実践を通して支援員の役割を以下のように考えた。

- 嫌われることを恐れず、許せないところははっきりと注意をすること。  
→児童にとっては大切なことである。ただし、学級担任と共通認識をもつこと。
- 思いっきり児童たちと遊ぶこと。  
→授業ではわからない児童の良いところや人間関係などがわかる。信頼関係を築くきっかけになる。
- できるだけクラス全員と話をするように心がけること。目立たない子ほど見てあげて、機会をみつけて話をする。  
→目立つ子は話しかけてくれるし、接する機会が多い。
- 情報交換ノートには正直な気持ちや担任がいないときの出来事などを書いて、お互いの思いが伝わるように心掛けること。  
→どのようにすればいいのか自分の気持ちが整理しやすく、悩みが解決されることも多い。また担任の思いを知ることで、どのようなことに気を付けて支援員をすればいいのかもわかってくる。

#### V. 参考文献

- 1) 都築繁幸 (2009) 外国人児童生徒の発達障害の理解と支援 愛知教育大学地域連携センター・平成21年度外国人児童生徒教育講座テキスト 1-7.
- 2) 都築繁幸 他 (2010) 公立小学校の外国人発達障害児の学習支援の実践 2009年度文部科学省特別経費(連携融合事業) 外国人児童生徒のための学習支援事業報告書 1(1), 70-75.
- 3) 都築繁幸 他 (2010) 発達障害が疑われる外国人児童への学習支援の在り方に関する事例的考察 障害者教育・福祉学研究 6, 69-75.
- 4) 吉原真寿美, 都築繁幸 (2010) 小学校の特別支援教育支援員の在り方に関する事例的考察 愛知教育大学研究報告, 教育科学編. 59, 21-28.